### 書評

### 金川千尋氏の経営哲学は、世界に伝えるべき 最適の主題であり、最強のメッセージである

- ■評者 有限責任 あずさ監査法人 理事 (前国際会計基準審議会(IASB)理事) 山田辰己

今でこそ少なくなったが、 日本の企業経営を外国人の視 点から見て、賞賛・批判した 書物は多い。しかし、日本人 であり、しかも、大企業の経 理に長年携わって来た人物に よる日本の経営者についての 叙述が英語で書籍となること はほとんど皆無と言っていい。

本書は、2010年9月に出版された「Mr. 金川千尋 世界最強の経営」(中経出版)の英語版である。著者である金児昭氏は、信越化学工業のCFOとして38年にわたり、同社の経理部門で活躍され、その企業人としての活動の中で、1990年に同社の社長となった金川千尋氏の経営の要語に触

れ、それを記述されたのが、日本語版の書籍である。同書の内容については、すでに、行天豊雄国際通貨研究所理事長・日本CFO協会理事長が、「CFO Forum」第35号(2010年12月)(次頁参照)の中で紹介されているので、再述は避けることとし、ここでは、その英語版の刊行の意義について触れることにしたい。

金児氏は、日本語版のなかで、「本書が日本中・世界中の会社・店・個人企業・個人のための経営書として必ずお役に立つと私は信じています。そしていつの日か、本書の英訳本を出版し、世界中の人々に読んでいただきたいと、心から願っております。」と英語版刊行の「夢」を語られている。本書は、2011年12月に刊行されているが、金児氏は、1年余りの間に「夢」を実現されたことになる。

よく言語は道具であると言われる。語られる内容が重要という意味であるが、評者の限られた経験からも、それは実感できる。しかし、それを世界中に伝えるためには、世界で



最も広く使われている英語にするしかない, すなわち, 言語の壁があるのも, また, 厳然 たる現実である。

透徹した企業経営の真髄は、その実践によって証明され、その成果である業績によって追認されるものである。そのことを13期にわたって実践されてきた金川氏の経営哲学を、日本語で語った日本語版は、やはり、英語にすることによってしか、世界に伝えることはできない。その意味で、長年にわたる実績で証明された金川氏の経営哲学は、日本企業のメッセージであるといえる。その最適・最ら世界に伝えるべき最適の主題であり、最強しようの経営哲学を、世界へ向かって発信しようの経営哲学を、世界へ向かって発信しようかって戦いを挑んだ日本企業の先人の熱き思いと共通するものがある。

本書の英語は、大変こなれた読みやすい表 現となっており、日本語版と併せて是非一読 することをお勧めしたい。 書評

定価:一、五七五円 発行: 中経出版



良い会社とは、正道(フェアウエイ)を歩きながら

成長を続ける会社。

行天豊雄 EACFOMSEE

**||正面から戦いながら、売上と利益をあげていく。** 

## 類まれな経営

ろしたのが本書である。 川千尋氏のその経営力について書き下 た金児昭さんが、同社の実力経営者金 るまで、同社の経理部門で三八年勤め 信越化学工業のCFOとして退任す

るように、出版社からの依頼を受けて 下ろしたという。現役の経営者を元部 いて「誰にも話さず、相談せずに」書き 元の上司である金川千尋氏の経営につ は著者の金児さんが前書きで書いてい を書き記した本は数多くあるが、本書 会社の経営者が自らの経営の軌跡

> 頼関係があってはじめてできることで が築き上げた、金川千尋氏との強い信 における経理の現場で著書の金児さん れる。信越化学工業における三八年間 本というのは、恐らく類がないと思わ

続けられ、既に一〇〇冊を超える著書 退任されてから精力的に執筆活動を である。信越化学工業を一九九九年に が発足した二〇〇〇年からの付き合い 本CFO協会の最高顧問であり、同会 金児さんは、私が理事長を務める日 下が本人の了解もなしに書き下ろした

りやすさの点において傑出している。 くの経営書と比べて読みやすさとわか とばかりが書かれている。本書も、多 も実体験に基づいた現場で体得したこ を出している金児さんの著書は、どれ

# 経営の「正道」を行く

れるのは金川氏の「正道」を行く、言う の経営者である。本書を読んで感じら 企業に上り詰めた。まさに「世界最強 なれば基本に忠実な経営である。 世界の化学会社の中で圧倒的な優良 た。ムーディーズ格付けも「Aa3」と が軒並み赤字転落となったなかで 録は阻まれたものの、日本の優良企業 機とした世界的な不況に見舞われた して以来、一三期連続で最高益を更新 二〇〇九年三月期にいたって増益の記 し遂げてきた。 リーマンショックを契 一、五四七億円の当期純利益を計上し

てのものに違いない。

実体験に基づいた国際経営感覚

掛ける投資ファンドや、透明性と説明 至上主義を標榜して敵対的買収を什 の枠組みが相次いで導入された。株主 責任を強く求める資本市場に対応すべ 景に米国型のコーポレートガバナンス 日本にも資本市場のグローバル化を背 年」を過ぎようとしているが、この間 バブル経済が崩壊し「失われた二〇

金川氏は、一九九〇年に社長に就任 く、日本企業の多くがさまざまな経営 ドしてきた金川氏の強靭な精神力あっ ければならない」と、自ら現場をリー るところであろう。「社長が一番働かな が最も難しいということは誰もが認め 命」というだけあって極めてシンプル を追求し、税金を納めるのが会社の使 けである。その中で、金川氏の経営は 手法を取り入れて悪戦苦闘してきたわ ていることがわかるが、実はこれこそ れることなく、経営の基本を貫いてき だ。流行の経営手法に表面的に惑わさ 「コンプライアンスを厳格に進め、利益

りいち早く海外への事業展開の陣頭指 先して取り入れている。一九七〇年よ の」と公言して一Rには自ら注力する 覚の奥の深さを感じさせてくれる。 現場経験で培ったであろう国際経営感 揮をとってきた金川氏が、これまでの など、欧米的な企業経営スタイルも率 活用しているほか、「会社は株主のも 人材を積極的に社外取締役に招いて また一方で金川氏の経営は、優秀な

だきたい一冊である きる。ぜひ多くの企業人に読んでいた いくためのヒントを見つけることがで せにするという企業の目的を遂行して ち残っていくのみならず、世の中を幸 本書には、日本企業が国際競争を勝

> CFO FORUM 第35号 (2010/12) p. 34 〔出所〕